

令和元年5月28日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370535

研究課題名(和文) 出土資料・実用資料・美的資料を包括した平仮名史記述の総合的再構築

研究課題名(英文) Reconstruction of a history of Hiragana by integration of Excavations, Documents and Calligraphy works

研究代表者

矢田 勉 (YADA, Tsutomu)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：20262058

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：平安時代の平仮名という、日本語学以前に書道史学によって扱われてきたこともあって、美的な典籍資料(いわゆる「古筆」)に偏った印象があるが、実際には、手紙(消息)や経済活動に関わる文書などの用途が主であった。それに加えて、近年は、平仮名の草創期の資料が、出土物として多く発見されてもいる。

本研究は、宮廷女性の文字であった、という思い込みを克服して、平安・鎌倉時代以降の平仮名の真実のあり方を描き直そうとするものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

社会一般に根強い、「万葉仮名の草体化による平仮名の創成から平仮名の美的成熟へ」というごく単純な平仮名史の構図を克服して、精確な平仮名史のあり方を、学術的にも社会一般的にも提示することで、本邦の文字文化に対する正しい理解を得るとともに、文字はなぜ、どのように変化するか の原理の一端を明らかにすることを得た。

また、平仮名に伴って開花した仮名文学や書道をはじめとする日本文化について、正しくそれを分析するための基盤的知識ともなりうる。

研究成果の概要(英文)：Hiragana of the Heian era has a strong impression as calligraphy works, because it was aesthetics, not Japanese linguistics that dealt with it earlier. However, it was also actively used practically. In addition, in recent years, it has been widely discovered as an excavated material.

This research is intended to overcome the belief that Hiragana was only court lady's use in the Heian era, and redraw its correct history.

研究分野：日本語文字・表記史

キーワード：平仮名 平仮名史 仮名字体 出土資料 実用資料 美的資料 文字の変化原理 消費的書記

1. 研究開始当初の背景

(1) これまでの平仮名史研究は、国語史学に先んじて平仮名書記を研究対象としてきた書道史学の影響もあり、10世紀以前については実用的資料である消息資料を中心に、11世紀以降については殆ど専ら美的資料である典籍資料（所謂「古筆」）によって、記述されてきた。しかし、11世紀以降にも平仮名の実用的用途は存在し、殊に12世紀以降にはその範囲が大きく拡大したことが必ずしも考慮されて来なかった。そのために、平仮名の実用的側面と美的側面との関係性も明らかにし得ていなかった。その両者を等しく統合的に俯瞰した記述の再構築が求められる研究史的状况が存在していた。

(2) 加えて、近年、平仮名草創期に係る出土資料が陸続と発見されている状況があり、専ら紙本資料・伝世資料のみを取り上げてきた平仮名史記述は、大幅な更新を必要とする状況があった。

2. 研究の目的

(1) 11世紀以降の平仮名資料について、実用的資料と美的資料とを共時的に分析することによって、院政期以降の平仮名使用の実態を総合的に捉え直すとともに、美的な平仮名資料が未だ発生していなかった10世紀以前の消息資料等の平仮名の様態との関係性を分析することによって、平仮名の美的発達の原理を表記史的に探ろうとする。

(2) 近年極めて重要な発見の相次いでいる、平仮名草創期の出土資料について分析を加え、平仮名の創出および発展の過程、また平仮名に関わる文字習得過程の展開について明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 平仮名史資料のうち、出土資料については、近年の発見でもあり未だ概説的記述に取り上げられているものではなく、表記史的観点からのデータ化が不十分である。本研究では、各資料につき、画像データ、基礎的情報（出土状況・外形的特徴等）、使用仮名字体データを、現地調査および報告書等によって集積する。

(2) 美的資料については、平安期の古筆資料について可能な限りの網羅的なデータ収集を行う。鎌倉時代以降のものについては網羅的な調査を目指すことは不可能であるが、可能な限り調査を加える。調査は、その貴重性に鑑みて、『古筆学大成』をはじめとする影印文献を中心に行い、補足的に所蔵機関での調査を行う。

(3) 実用的資料（消息・文書資料）については、研究代表者のこれまでの研究でデータ収集が完了している東寺百合文書・東大寺文書・留守家文書・青方文書等について、補足的調査を行うとともに、他の文書郡についても、可能な限りデータ化を行う。

(4) 上記(1)～(3)によって収集した平仮名に関わる三種の資料群について、異資料群間の共時的対照と、通時的变化や相互影響関係に対する詳細な分析を行う。

4. 研究成果

(1) 本研究によって、「万葉仮名の草体化による平仮名の創成(9世紀) 平仮名の美的成熟(11世紀)」という平仮名史のごく単純な構図は、大幅な更新による再構成を為すことを得た。現在、それに基づいた平仮名史の通史的記述を、書籍として公刊することを準備中である。その概略を示すならば、以下の通りである。

消費的用途における平仮名の創成(9世紀・出土資料等)

古層の仮名字体の交替による、基層的仮名字体の完成(10世紀・消息資料)

散らし書きの展開と仮名字体の増加(11世紀・消息資料)

美的資料の出現(11世紀・典籍資料[歌書])

基盤的字体群としての「いろは仮名」体系の完成(11世紀・出土資料等)

実用的資料の範囲拡大と主用仮名字体の1音節複数化(12世紀末以降・文書資料)

美的資料の散文典籍への拡大(13世紀)

鎌倉時代に確立した平仮名体系の継承(14-16世紀)

整版印刷に伴う変体仮名の収斂傾向と「いろは仮名」の変質化(17世紀以降)

(2) 平仮名史叙述の再構成を目指す中で、平仮名史を含む文字・表記史の叙述理論、またその言語史叙述との関係性について精細に考究することを得た。その一端は「言語史叙述と文字・表記史叙述 その共通点と相違点」(『日本語史叙述の方法』所収)として公刊した。

(3) 平仮名をめぐる前近代文字学習史に関して、いろは歌墨書資料をはじめとする出土資料や文書資料から詳細に考察することを得、またその後の展開を追跡的に調査する中で、中世後期・近世期におけるその性格の変質を明らかにすることができた。その結果は2編の論文として公刊した。

(4) 研究代表者が学識経験者として参画していた、国立国語研究所と情報処理推進機構による、変体仮名のISO/IEC 10646への収録提案のための作業において、本研究の成果を変体仮名選定に活かすことができた。その一端は「変体仮名のこれまでとこれから」等の論文また口頭発表によって公表することを得た。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計5件)

矢田 勉、近世のリテラシーと漢字仮名交り文、近代語研究、査読無、2018、pp.75-102

矢田 勉、『源氏物語』はカノンだったか 国語学史の観点から、むらさき、査読無、2017、

pp.80 84

高田 智和、小林 龍生、田代 秀一、矢田 勉、ISO/IEC 10646 への変体仮名収録提案
レパートリと符号化アーキテクチャ、研究報告人文科学とコンピュータ、査読無、2016
CH 109、2016、pp.1 5

矢田 勉、近世における文字教育の一側面 変体仮名習得をめぐって、国語文字史の研究、
査読有、15 巻、2016、pp.147 164

高田 智和、矢田 勉、斎藤達哉、変体仮名のこれまでとこれから、情報管理、査読無、58
号、2015、pp.438 446

DOI : 10.1241/johokanri.58.438

〔学会発表〕(計5件)

矢田 勉、近世のリテラシーと漢字仮名交り文、近代語学会、2017

矢田 勉、変わる文字・変わらない文字、広島大学国語教育カフェ、2016

高田 智和、銭谷 真人、斎藤 達哉、矢田 勉、小助川 貞次、當山 日出夫、学術情報
交換のための変体仮名セット、日本語学会、2015

矢田 勉、蓄蔵される記号としての文字史から消費される記号としての文字史へ—仮名墨書
土器の発見と文字史観の再検討—、日本史研究会、2014

矢田 勉、かな成立史・発展史と墨書土器—国語文字史研究の立場から—、京都産業大学日
本文化研究所シンポジウム、2014

〔図書〕(計2件)

矢田 勉 他、笠間書院、アプリでまなぶくずし字、2017、pp.55 57

矢田 勉 他、ひつじ書房、日本語史叙述の方法、2016、pp.123 144